

モンテーニュの「気をそらすこと」とパスカルの 「気晴らし」

山上, 浩嗣
大阪大学大学院文学研究科 : 教授

<https://doi.org/10.15017/2203043>

出版情報 : Stella. 37, pp.91-111, 2018-12-18. Société de Langue et Littérature Françaises de
l' Université du Kyushu

バージョン :

権利関係 :



モンテーニュの「気をそらすこと」と パスカルの「気晴らし」¹⁾

山 上 浩 嗣

パスカルはモンテーニュから多大な影響を被っている。ベルナール・クロケットの調査によると、『パンセ』のなかで語彙や発想の点で『エッセー』との関連が認められる箇所は、のべ238にのぼる²⁾。パスカルが『キリスト教護教論』構想の過程で直接親しんだ主な書物は、聖書のほか、アウグスティヌス、エピクテートス、ジャンセニウス、モンテーニュ、デカルトの著書を数えるのみである。なかでもモンテーニュの名は、『パンセ』のなかで最も頻繁に言及されている（アウグスティヌスの15回を凌ぐ20回）。

ただし、パスカルはモンテーニュの文章を発想の素材として用いても、彼の意見そのものに合意することはまれである。モンテーニュの名が直接言及されるのは、ほとんどが批判的な文脈においてである。それだけに両者の思想的対決はきわめて興味深い様相を呈している。にもかかわらず、二人の思想の比較に一著全体を充てた研究はこれまで、上記クロケット著と、前田陽一の『パスカルとモンテーニュとのキリスト教弁証論』（1949年）³⁾以外に見あたらない。ルネサンス思想のパスカルによる受容についての研究が注目を集める現状において⁴⁾、こうした課題の重要性については言をまたない。本論では、この大きな課題の探究の一環として、パスカルの「気晴らし *divertissement*」についての考えとの比較を念頭に、モンテーニュの「気をそらすこと *diversion*」をめぐる思想について考察する。

パスカルは人間の生涯の最重要課題、人間の「尊厳」をなす「思考」を、おのれの死を見つめること、おのれの死後の運命について考えること、すなわち、もし死後の生があるとすれば、それに与るためにどのように現世を生きればよいかについて考えることと位置づけ、そのような思考から外れる行いすべてを「気晴らし」とみなして批判している。「気晴らし」はパスカルの未完の著『キ

リスト教護教論』（『パンセ』に含まれる断章の大部分はその著の草稿であると考えられている）の枢要な主題のひとつであり、原著の「目次」をなす 27 章のうちの一つのタイトルにもなっている。

一方、『エッセー』には、「気をそらすことについて De la diversion」という章 (III, 4) がある。パスカルが多用する *divertissement* と、モンテーニュが章題として用いているこの *diversion* という語は、『プチ・ロベール・フランス語辞典』によると、それぞれ「心を占めていることから気をそらせる (*détourner*) 行為」、「気がかりなこと、悩み、心配ごとから気をそらせること (*détourner*)」という意味をもつ⁵⁾。すなわち両者は同義語である。

ただし、ジャン・メナールによれば、17 世紀においてはすでに、*divertissement* という語は、「気をそらせる」という意味で用いられることはなくなっていたという（たしかに、1690 年刊のフルティエールの辞書は、*divertissement* の語義として、「娯楽、楽しみ、息抜き *réjouissance, plaisir, recreation*」しか記していない⁶⁾）。パスカルはこの語の使用に際して明らかにモンテーニュの *diversion* の語の用法から影響を受けている⁷⁾。彼らにおいて *divertissement* と *diversion* という語が意味することがらや現象は、ほとんど同じであると考えてよいだろう。しかし、これから見るように、そのことがらや現象に対する価値判断に大きな違いがある。

また、モンテーニュは『エッセー』の「自分の意志を節約することについて」という章 (III, 10) で、「自己を自己からそらさない *ne pas se distraire*」というテーマについても論じている。リトレの辞書でこの *distraire* の項目を見ると、*distraire* (*distraction*) と *divertir* (*divertissement*) の語義の違いが説明されている。それによれば、*distraire* の語源が「あちこちに引っ張ること *tirer*」、*divertir* の語源が「あちこちにひねること（回転・転回させること）*tourner*」であり、「*divertissement* のほうが *distraction* よりもずっと強い」という。「*se divertir* するには観劇、舞踏会、祝宴、食事などの楽しみ」が必要であるのに対し、「*se distraire* には孤独な遊びなどのちょっとした満足だけで足る」とある。*se distraire* には大した力は必要ないということである。すると、*ne pas se distraire de soi* は「自己を（少しでも）そらさないこと」という意味になるだろう。

本論では、『エッセー』の主として「気をそらすことについて」と「自分の意志

を節約することについて」の章を中心に検討する。パスカルの「気晴らし」概念についてはほかで論じたので詳細には立ち入らないが⁸⁾、モンテーニュの考えとの比較のために適宜言及する。

I. モンテーニュと旅

まず、一見唐突なように思えるかもしれないが、モンテーニュの「旅」についての考えを見ておきたい。

ルネサンスの時代、法律家、商人、職人、学生など、「誰も彼もが旅をして」いたという⁹⁾。モンテーニュも、自邸とボルドーとの往復、パリ、ルーアン、ブローアなどフランス国内の都市への旅のほか、スイス・ドイツ・イタリアへの約1年半にわたる旅（1580年6月～1581年11月）を敢行した¹⁰⁾。

『エセー』「子どもの教育について」の章にモンテーニュの旅についての考察がある。そこで彼は、自身の「判断 judgement」を形成する修行のために、「人々との交際」、「外国を訪れること」の重要性を強調している（I, 25, «De l'institution des enfans», 158/153-154）。また同じ章で、「世界」を「鏡」「教科書」とみなし、世界を知ることによって人は自己の意見や習慣を正しく判断すること、自己の判断の不完全さを認めることを知るのだと言う。旅の目的はこの点にある——

この広い世界こそ〔…〕我々が自分を正しく知るために自分を映して見なければならない鏡です。要するに私は、この世界が我が生徒たるご子息の教科書であってほしいのです。世の中にはかくもさまざまな気質、学派、判断、意見、法律、習慣があることによって、我々は自分自身のそれらを健全に判断し、自分の判断に不完全さと生来の弱点があることを認められるようになります。これは決してささいな教訓ではありません。（I, 25, 164/157-158）

一方でモンテーニュは、「空しさについて」の章では次のような言葉で、旅を人間の本性の不定さの反映とみなしている——

私は、文字通りにとるなら、旅行の楽しみは動揺と優柔不断の証拠であることをよく知っている。それゆえ、この動揺と優柔不断こそが、我々の主たる、支配的な特質である。（III, 9, «De la vanité», 1034/988）

また同時に彼は、旅の目的を次のように説明している――

私が旅行を企てるのは、旅先から帰ってくるためでもなければ、やりとげるためでもない。動くこと (me branler) が楽しい間、動くためである。つまり私は、歩き回るために歩き回るのである。利益やウサギを求めて走る者は、走っているとは言えない。陣取り遊びや競走のために走る者こそが、本当に走っているのである。(III, 9, 1023/977)

ここでは「動き」が自己目的化している。旅の目的は単に動き回ること、旅の目的は旅にほかならない。実際モンテーニュはドイツ・イタリアへの大旅行中、計画通りに進まないことをまったく気にせず、急遽予定外の土地に向かうこともしばしばであった。モンテーニュにおいて、旅の目的が「判断」の形成にあるという主張と、旅を自己目的化する見方とは、矛盾しないということである。

実はモンテーニュは、学問についても同じようなことを言っている。彼は学問の目的を「自己の判断 son jugement」の形成であるとしながら (I, 25, 157/152)、記憶のための勉強、知識を増やすための読書、金儲けのための勉強を批判し (I, 24, «Du pédantisme», 141/136 ; I, 25, 155/150)、野放図な読書 (旅に書物を携帯するが、読まずにいることもよくある) (III, 3, «De trois commerces», 869/827-828)、楽しみのための学問 (III, 3, 871/829) を奨励しているのである。

どういうことか。それはモンテーニュにとって、目的論的な思考を超えることによってしか、真の目的には到達できない、ということである。遊戯性、無目的性こそが真の判断形成の条件だということである。これは、人間をとりまく「世界」があまりにも大きく、人間のわずかな知性や知識の条件で設定される目的に従えば、視野はかえって狭くなる恐れがあるからではないか。それよりは、自己の無能力、無知を自覚して、たまたま目に映るもの、興味を抱くものに対して虚心坦懐に向き合うほうがよいのだ¹¹⁾。

II. 「気をそらすこと diversion」

目的に至るまでの経過を楽しむこと

上の引用にある、「利益やウサギを求めて走る者は、走っているとは言えない」という印象的な言葉に注目しよう。パスカルはまさにこの一句に反応し、

「気晴らし」を批判する根拠のひとつとして、人間において手段と目的が転倒していること、「獲物」を求めるはずの「狩り」という行為が、実際は「狩り」そのものを目的としている点を挙げています。狩人はウサギを求めて狩りをするが、かといって、ウサギをやるから狩りをやめろと言われてたら、いらないと答えるだろう、と言うのである。ここから彼は、「人は獲物よりも狩りを好むのだ」と結論している（S168-L136, p. 906）。

これに対してモンテーニュは、「レーモン・スボン」の章で同様の現象を指摘するが、これを批判するのではなく、受け入れているように見える。積極的に肯定しているわけではないが、このような人間の傾向を前提として、よりよき生の送り方を探究しようとしているようだ。

モンテーニュはここで、狩りのための狩り、学問のための学問の楽しみを享受することを是認している。これは、上で見た彼の旅に対する考え方と正確に一致している——

獲物はまず得られないと知りながらも狩りを楽しいと感じる人は、なんら変人ではない。[……] どんな粗末な食べ物でも、食べることだけが楽しみになる場合があるし、うまいものが必ず滋養と健康のためになるわけではない。同様に、我々の精神が学問から得るものも、滋養と健康のためにならなくとも、快樂を与えてくれることがある。（II, 12, «Apologie de Raimond de Sebonde», 538-539/510-511）

次の一節を見よう。モンテーニュの一大性愛論である「ウエルギリウスの詩句について」からの引用である——

スペイン人やイタリア人の恋愛は、もっと丁寧で、臆病で、気取っていて、つましいがゆえに、好ましく思われる。誰だったか、かつて、飲み込む食べ物をより長く味わうために、喉が鶴のように長ければよいと望んだ人がいた。この願いは、あの素早くせわしない快樂に、ましてや、まさにせっかちという欠点のある私のような者には、いっそうふさわしい。その快樂が逃げ去るのを妨げ、序奏のあたりでそれを引き延ばすために、スペイン人やイタリア人の間では、目くばせや、うなずき合いや、口説き文句や、身ぶりなど、すべてのものが、好意とその返事の役目をはたしている。[……] 女性たちにも、自分の値打ちを高め、自信を深めることを、我々男性を楽しませ、だますことを、教えよう。[……] 享樂のうちにはしか享樂を見出せない人、圧勝でなければ気がすまない人、獲物を得ることでしか狩りを楽しめない人は、我々の学校に入るのにふさわしくない。[……] 女性たちは、ひとたび我々のものとなるや、もはや

我々は彼女らのものでなくなる。(III, 5, «Sur des vers de Virgile», 923-924/880-881)

ここでは、目的に至る経過が長引くことの楽しみが述べられている。好みの女性を我が物とするという目的は、すぐに達成するとつまらない。「女性たちは、ひとたび我々のものとなるや、もはや我々は彼女らのものでなくなる」からだという。そこでモンテーニュは、相手の女性に対して、もっと自分の価値を引き立てるような演技をし、もっと男をじらすことを求める。それによって男の(つまり自分の)期待と欲望が増幅するからである。この姿勢も、旅において寄り道や迂回を楽しむ姿勢と軌を一にしている。また、ここには、「獲物を得ることではしか狩りを楽しめない人は、我々の学校に入るのにふさわしくない」という注目すべき主張も見られる。人間が「獲物より狩りを好む」さまに空しさを見たパスカルは、明らかにモンテーニュに挑戦していることがわかる。

次は「空しさについて」の章のなかの、プラトン『パイドロス』やプルタルコス著作の一貫性のなさ、変化と多様性を称賛する一節だ――

私は、奇妙な縞模様によって二分されたプラトンの対話篇〔『パイドロス』〕に目を通した。前半は恋愛を、後半は修辞学を扱っている。彼ら古代の人々は、このような転調を嫌わないどころか、このように風まかせて転がっていくことによって、あるいはそのように見せることによって、驚くべき魅力を示している。私の章の題名は必ずしも内容と一致しておらず、多くの場合、なんらかの印によって内容を示すだけである。〔…〕私はびよんびよん跳ねる詩のような進み方が好きだ。詩はプラトンも言うように、軽妙で、気まぐれな、神的な技芸である。プルタルコスの作品のなかには、彼がその主題を忘れていたもの、主題に関する話題が無関係な内容の下に窒息して、偶然にしか現れないものがある。たとえば「ソクラテスの精霊について」の調子を見よ。おお神よ、この浮かれた跳躍、この変化はなんと美しいことか。しかも、無頓着で偶発的に見えるだけに、ひととき美しい。(III, 9, 1040-1041/994)

気まぐれな文章、論述の「浮かれた跳躍 *gaillardes escapades*」, 目的からの逸脱、表題と内容との不一致に対する好みが見られている。『エッセー』自体がそのような性格の文章であることを我々は知っているし、また、これが目的地に直線的に向かうことにこだわらない(当初の目的地を忘れて別の目的地を目指すことも辞さない)モンテーニュの旅とも通じ合うことが、いまや明らかである¹²⁾。

以上、モンテーニュにおいて、①行為における手段の自己目的化、②目的実現の遅延、③(当初の)目的からの逸脱、が積極的な意味をもつことを駆け足で見た。これに対して、パスカルは「気晴らし」を批判する理由として、「気晴らし」における手段と目的との価値の転倒を挙げていた。この点においてモンテーニュとは明白に対立する。パスカルはまた、休息を求めているようで、いったん目的を達成すると倦怠を覚え、新たに騒ぎを求める点に人間の空しさを認めていた(これはパスカルの「気晴らし」批判の主要な根拠であった)。この点は、モンテーニュがわざわざ目的への到達を遅らせることに享楽を認める態度に対する批判となりうる。

気分転換 (diversion) の受入れ

次に、モンテーニュの「気をそらすことについて」の考察を概観しよう。

モンテーニュは、「気をそらすこと」の効用についてさまざまな例を挙げるが、それらはいずれも世俗的で日常的なことがらに関する、暫定的な(しかも多くの場合は利己的な策略のための)効用であり、わざわざ言挙げするようなものでもないというような印象すら抱いてしまう。以下に、モンテーニュが挙げる例のうちのいくつかを取り上げよう。

第一に、「本当に悲しんでいる夫人を慰めること」。モンテーニュは人にそのように依頼されて、上手に果たした。その方法はこうだ――

むしろ、彼女が私の話に注意を向けてくるにつれて、ひそかに話題の向きを変え、ほんの少し隔たった似たような主題へと、少しずつそらしていくことで、いつの間にか彼女のつらい思いを取り去ってやり、私がそこにいる間は、彼女を上機嫌で、落ち着いた気持ちにしてあげた。私は気分転換の方法を用いたのである。(III, 4, «De la diversion», 872/831)

このように、モンテーニュの言う「気をそらすこと」は、主体が気をそらされていることを意識しないときにより大きな効果を発揮する。それは相手をだますことでもある。もっとも、彼はこのような方法が悲しみに対する根本的な治療法にはならないことを自覚している――「あとから私にならって同じ方法を用いた人々は、彼女を癒やすことはできなかった。なぜなら、私は彼女の悲しみの根本に斧を入れたわけではないからだ」(III, 4, 872-873/831)。

これによく似た例として、モンテーニュは自身の経験を挙げる。親友ラ・ボエシを失った悲しみを「まぎらすために強烈な気分転換が必要だったので、わざと、努めて恋をあさった」(III, 4, 877/835)という経験である。彼は言う。「変化はつねに心を和ませ、不安を溶かし、散らしてくれる。私はつらい思いと戦うことができなければ、それから逃げる。そして逃げながら脇道へとそれ、相手の目をごまかす」(III, 4, 877/836)。

「逃げる *fuir*」, 「脇道にそれる *fourvoyer*」とあるように, 「気分転換」は根本的な解決策ではない。悲しみをしばし和らげるため、忘れるための実践的な策略、自分を「ごまかす」手段である。自分で自分をだますこの策が、完全であるはずがない。自分がだまされていることを意識しているからだ。モンテーニュはそれでも、このような非力な策の有用性をくり返し強調しているのである(なお、このときのだます自分とだまされる自分との二重性は興味深い問題である。あとで少しふれる)。

パスカルは「気晴らし」の断章で、少し前にひとり息子を亡くした男が、イノシシの狩りに没頭して悲しみを忘れるさまを描き出し、こう記す。「人間は、どれほど悲しみに満たされていても、何か気晴らしに引き込むことができれば、その間は幸せである」(SI168-L136, p. 909)。パスカルは、このような人間のあり方に人間の悲惨を見る。なぜなら、まさに、この気晴らしによる幸せは偽りの幸せにすぎないからだ。偽りの一時的な幸せを承知でそれに頼ることを奨励するモンテーニュとは対照的である。

「気をそらすこと」が自己本位の、利己的な策略にもなりうることをもともと雄弁に示す例が、モンテーニュが挙げるギリシア神話のアタランテとヒッポメネスの挿話だろう。美貌と俊足をもつアタランテは、言い寄ってくる多くの求婚者から逃れるために、「自分との競走に勝つ男と結婚するが、負けた男は殺す」と告げる。実際に多くの男が命を落とす。ヒッポメネスが恋の女神ウエヌスに助力を願って競走に挑む。ウエヌスはヒッポメネスに黄金のリングを3つ与える。競走が始まり、ヒッポメネスは、アタランテに追いつかれそうになるたびにそのリングを転がす。そのたびに彼女はリングを拾うために脇にそれる(*se détourner*)。とうとうヒッポメネスは勝利を取る(III, 4, 873-874/832)。

モンテーニュはこれを不謹慎な物語として語っているのではない。このような世俗的で邪な欲望を叶えるための策略として、気をそらす行為を位置づけ、

その有用性を評価するために語っているのである——

彼はここぞというとき、同じように第2、第3のりんごを落として彼女の走路をそらし、気をそらすことで (par ce fourvoyement et divertissement), 競走に勝った。(III, 4, 874/832)

「気をそらすこと」の例で、モンテーニュが挙げるもうひとつの重要なものは、死を前にした気分転換である——

我々はずねに〔死の〕ほかのことを考える。〔死後に来世で〕よりよい生を送りたいとか、子どもたちが立派になってほしいとか、自分の名前がこの先有名になってほしいとか、〔死によって〕やっとこの世の苦しみから逃れられるとか、自分に死をもたらすことになったあの連中に罰が当たるとよいといった願いが、我々をつかまえ、支えてくれるのだ。(III, 4, 875/834)

我々は死を迎えるに際して、自分の死後に生じる出来事や現象（来世の幸福、子孫の繁栄、死後の名声など）について希望をこめて想像することで、死の恐怖や苦しみについて直接向き合うことから免れるのだという。

ほかに彼は、火刑台の上でおのれの信仰の正しさを信じて祈りを唱える人々や、自らが上らされる死刑台の準備の光景から考えをそらす人々の例を挙げている (III, 4, 874-875/833)。モンテーニュによれば、彼らは「死との闘争を避けている、死から想念をそらせている」。

モンテーニュはこのふるまいを、ほかの「気をそらすこと」と同様に、人間の習性からくる当然のものとして受け止めているように見える（ただし彼は、死そのものから目をそらさずに覚悟を決めて死に臨んだソクラテスを賛美している）。

モンテーニュの死に対する態度については、『エッセー』の各所で話題となり、しかもその記述は相互に矛盾を含んでいるため、もっと詳細な検証が必要だが、「気をそらすことについて」の章の記述を見るかぎり、パスカルときわめて大きな対照をなす。パスカルは信仰と関わない人間のふだんの活動のすべてを、死の想念から逃れるための「気晴らし」と位置づけ、これを人間の不幸の根本的な源泉とみなした¹³⁾。また、パスカルにおいて「死を考えること」とは、モンテーニュとは異なり、死という出来事そのもの、自分の死の瞬間を考えるこ

とではなく、自分がいずれ死ぬという運命を自覚した上で、死後の生に与るために現世をどのように過ごすかを考えることである。パスカルの思想はモンテーニュの文章を発想の源としているとしても、その広がりや深みにおいて大きく発展を遂げていると言える。

Ⅲ. 「自己を自己からそらさないこと ne pas se distraire」

自己に集中すること

これまで、モンテーニュがパスカルとは異なり、享乐的な理由、ときには利己的な理由から「気をそらす」行為を肯定しているを見てきた。ここで、彼の次の主張を見よう――

私を私からそらし、他のものに結びつける情動 (affections qui me distraient de moy, et attachent ailleurs) には、私はまさに全力で抵抗する。私は、他人に自分を貸す (se prester) のはよいが、自分を与える (se donner) のは自分自身に対してだけでなければならない、と考えている。(III, 10, «De mesnager sa volonté», 1048/1003)

「気をそらすこと se divertir」を肯定する姿勢と、「自分を自分からそらすこと se distraire de soi」を戒める姿勢との間に、どのような整合性があるのだろうか。

まず、「自分を自分からそらす」とは、どのような事態だろうか。次にその具体例が示されている――

私は、少年のときの年老いた父の姿をまざまざと思い出した。父は、公務のいざごぎにひどく心を乱されていた。彼は年齢からくる衰えのせいでもうだいぶ前から自宅を離れられなくなっていたのだが、その自宅の平穏な空気も、家庭の諸事も、自身の健康のことも頭になかった。また、彼ら〔ボルドー市民〕のために長くつらい旅に出なければならないため、このままだと死の危険もあると自覚しながら、自分の命のことも気にならなかった。〔…〕私はそのような生き方を、他人の場合には称賛するが、模範にしようとは思わない。(III, 10, 1051/1005-1006)

モンテーニュは、職務上の義務に身も心も捧げて疲れ果て、おのれの健康や家庭を犠牲にする父のような生き方を、立派であると認めながらも、明確に退けている。モンテーニュは、隣人のための自己犠牲という、キリスト教における

枢要な美德を拒否しているのだろうか。実際、マックス・ホルクハイマーは、モンテーニュが『エッセー』のほかの箇所でも再三強調する、人間や動物に対する博愛心と矛盾するようなこの発言に痛烈な皮肉を浴びせている¹⁴⁾。上の引用の直後の文章を見ると、そのような推測がますます真実味を帯びてくるように思われる——

世間の規則や教訓の大半は、そうした生き方を採用し、社会の公共的利益に供するために、我々を我々から外に押し出し、公共の場に追い出そうとするものだ。人々は、我々が生まれつき自分にしがみつきの執着しすぎるものと想定したために、我々をおのれ自身から遠ざけ、そらすこと (nous destourner et distraire de nous) を美德だと考えたのである。(III, 10, 1051/1006)

「我々は生まれつき自分にしがみつきの執着しすぎる」という見方は、キリスト教が反復してやまない人間観であり¹⁵⁾、パスカルはまさにこの傾向を、『パンセ』のなかで「自己愛 amour propre」と呼んで厳しく糾弾している。パスカルにおいて、「神への愛 charité」を妨げる最大の要因がこの「自己愛」なのである。モンテーニュは、社会奉仕、公共善への貢献を美德とする社会常識に抗い、この「自己愛」に対してもっと寛容であるべきだと主張することで、キリスト教的人間観に真っ向から抵抗しているように見える。

だが、この「自分の意志を節約することについて」の章をよく読めば、モンテーニュの意図はそれとは正反対ではないかと思えてくる。どういうことか——

パラス〔知恵の女神アテネ〕の神殿には、他のあらゆる宗教におけるのと同じように、民衆に見せるための明白な玄義と、達人だけに見せるためのより高度な秘密の玄義があったはずだと、私は考えている。おそらくこの達人のなかに、各人が自己に対して払うべき愛の本来の姿があると思う。それは、我々が、荣誉や、知識や、富や、その他これに似たものに、ひたむきで極端な執着をもって、まるで自分の手足に対するようにして抱くような、誤った愛ではない。また、木蔭がからみついた壁を腐らせて破壊してしまうときのような、だらけた無分別な愛でもない。それは、健全で秩序のある、有益でかつ心地よい愛である。(III, 10, 1051-1052/1006)

ちょっと分かりにくい文章だが、要するに人が自らに対して与える愛には真偽二種類のものがあるということだ。自己に対する正しい愛は、「健全で秩序のある、有益でかつ心地よい愛」である。モンテーニュは、この真の愛に「荣誉、

知識、富」に対する執着に比されるような過度の自愛心を対置し、これを「誤った愛」として批判している。

我々は多かれ少なかれこれら「荣誉、知識、富」を求める欲望をもって、その獲得を生きがいとし、生存の動機としている。これはある程度までは自然なことであるが、ときにその欲望が過剰にふくらみ、冷静な判断力を失ってしまうことがある¹⁶⁾。なかでもモンテーニュがとくに強く警戒するのが、名誉(gloire)の探求である。人間において荣誉への欲求は、自己愛と区別が困難である。これはパスカルが再三警告していることだ。彼によれば、人間は貧しい人に施しを与えたり、病気の人を助けたり、悩める人を慰めたりするが、実のところそのような親切の奥には、他人から愛されたい、称賛されたいという自己愛がひそんでいる。しかもそのとき、その人は衷心から他人のためを思って行動しており、おのれの利己心を疑うことがまったくないという¹⁷⁾。

モンテーニュも、ここで公務に没頭する父の姿に、そのようなひそかな自愛心を認めているのではないだろうか。市長の義務とは、まさに他者に対する奉仕であって、職務に忠実であればあるほど自己の欲得や健康や安全を犠牲にしがちである。また市長は、そのようなふるまいの代償として市民から好意と称賛を得る。公職にある者の危険は、知らず知らずに自己の荣誉を求めて他者に身を捧げてしまうという逆説に陥ってしまうことだ。モンテーニュは以上の教訓を、パラス＝アテネ女神が伝える高度の秘義として語っている。つまり、これを一般大衆には認識されにくい真理とみなしているのである。

このように考えると、「自己を自己からそらさぬべし」とのモンテーニュの忠言は、自己の欲望にもっと寛容になるべしという意味ではなく、それとは正反対の、自己を激しい利己心から解き放つべしという意味であると理解できる。我々は自分でも知らぬうちに、自己の激しい欲望に引きずられて、結果的に不本意な生を送っている。それは、公共の善に身を捧げる高い地位にある人物においてなおさら甚だしい。世間はむしろそれを立派な態度だとみなすからである。人間は世間の意見を気にするあまり、他人の意見と自分の意見との区別がつかなくなる。モンテーニュは、『エッセー』のなかで何度もこのことを指摘している。次はその一例である――

芸術であれ、自然であれ、我々の生が他人との関わりによって成り立っているという

考えを刻みつけるものは、百害あって一利なしである。我々は世間一般の意見に合わせて体裁を繕うために、自分の利益を犠牲にしている。自分が自分にとって実際かどうかより、人にどう思われているかを気にするのである。(III, 9, 999-1000/955)¹⁸⁾

モンテーニュが引用するデルフォイの神の教えも、まさにそのことを戒めている。人間はそもそも自分自身の意志、自分自身の義務を知らない、人間は他人の意志を自分の意志と勘違いしている、ということである。人間はそのような他人の意志にかなう自己を作り上げるために汲々とし、本来あるべき自己を見失っている。モンテーニュにとって「自己に集中せよ」とは、自己の欲望と他者の欲望とを峻別せよ、という意味にほかならない――

次は、かつてデルフォイの神が授けた逆説的な掟である。「汝の内を見よ。汝を知れ。汝自身をつかめ。外で費やされる汝の精神と意志を、汝自身のなかに引きもどせ。汝は汝自身を流出させ、拡散させている。汝自身に集中し、汝自身を支えよ (appilez vous, soustenez vous)。汝は裏切られ、まき散らされ、奪われているのだ」(III, 9, 1047/1001)

公私の区別

モンテーニュはこの「自己に集中せよ」という教えを、「皮膚と肌着を区別せよ」という有名なモットーへと発展させる――

我々の職業のほとんどは芝居のようなものだ。[...] 自分の役割を正しく演じなければならない。だがそれは、あくまでも借りものの人物の役として演じるべきだ。仮面や外見を真の本質と取り違えたり、他人のものを自分のものと間違えたりしてはならない。我々は、皮膚と肌着を区別することができない。顔に白粉をぬれば十分であって、心にまでぬってはならない。(III, 10, 1057/1011)¹⁹⁾

我々は人の視線や期待を意識しすぎて、それに応えようとするあまり、自己のかりそめの役割と本来的な自己、「仮面 masque」と「本質 essence réelle」、*「肌着 chemise」と「皮膚 peau」*を見分けることができなくなっている。我々はその区別を知り、あくまでも「皮膚」の自分、「本質」の自分の領域を確保すべきであるという。これは、他人の要請にむりやり従わされて行う仕事を放棄し、自分の内発的な欲求からくる行いだけを誠実に実行すべしという意味ではないか。

このことは、次を読めばよりよく理解できる——

自己に対する愛の義務を知ってこれを実行する人は、真に詩神の傍らで仕える人であり、人間の知恵と幸福の頂点に達した人である。そのような人は、自己に対する義務を正確にわきまえているので、自分の役割として、他人や世間を利用して自分自身に役立てなくてはならないと考えるし、他方で、そのためにこそ自分が負う義務や仕事を公共のために役立てなければならないと考えている。まったく他人のために生きていない者は、ほとんど自分のためにも生きていないのである。[……] 我々が負うべき主たる責務とは、各人が自分を導くことであり、そのために我々はこの世に生きているのだ。自分が正しく健全に生きることを怠っていないながら、他人をそのように導き教育することでおのれの義務を果たしたと考えるような者は、愚か者である。それとまったく同様に、他人に奉仕するために、自分自身の健全で愉快的な生き方を放棄してしまうような者は、私からすれば、間違った、不自然な方針に従っていると思われる。(III, 10, 1052/1006-1007)

「自己から自己をそらさないこと」「自己に集中すること」は、自己愛や名誉心を動機とする野放図な公務への没頭への戒めであった²⁰⁾。とはいえ、この戒めは決して、他者への奉仕、隣人愛の否定を意味するわけではない。それどころか、モンテーニュはそのような「自己への集中」、すなわち、自己の意志を知り、自己に対する義務を知ることによって、はじめて真に他者のために生きること、他人に奉仕することが可能になると言う。他人を知るには自己を知る必要がある。自己を知るとは、過剰な自愛心ではなく、あくまでも秩序ある欲望に導かれた「自分の健全で愉快的な生き方」とはいかなるものかを知ることである²¹⁾。これを知らずして他人に奉仕しても、それは単なる自己満足、さらには傲慢なおせっかいに陥りかねない。モンテーニュが公務に求めるのは、自己に対するのと同等の他者に対する誠意である。奉仕は、義務や見栄（「肌着」）のためではなく、自己の本源的な欲求（「皮膚」）に駆られて行われてはじめて、真に他人のためになり、ひいては自分のためにもなるのである²²⁾。

情動の制御

ところで、「自己をそらさぬ」という場合の「自己」とはどのような自己だろうか。最後にこの重要な問題について見ておこう——

私はできるだけ自己のすべてを自己のために用いる。だが、まさにこの自己の内部で、

私は私の情念を縛りつけ、制御して (je briderois pourtant et soustienndrois volontiers, mon affection), それが自己のなかに深く侵入しすぎないようにする。なぜなら、自己は他人次第でどうにでもなるし、私自身よりも運命のほうが大きい影響力をもっているからである。(III, 10, 1048/1003)

モンテーニュは、「自己」のなかの「情念 affection」, すなわち情動的部分を「自己」と分離し、その部分が自己を支配することがないように警戒しているという。したがって、「自己を自己からそらさない」と言うときに彼が想定している自己は、自己(魂)の情動的部分を除いた部分、すなわち自己の理性的部分または意志的部分のことではないか。モンテーニュは、理性や意志による情念の統治という、プラトンの²³⁾あるいはストア派的な理想を明らかに意識している。

次で語られる激しい恋愛の情念への抵抗は、そのような理想のための典型的な実践である――

あまりにわれを忘れて自分の情念 (affections) や利益を追いかけてはならない。私は若いころ、あまりにも激しく自分に向かって攻めてくる恋愛に抵抗して、その心地よさによってついに自分が意のままにされることのないように努めたものだ。いまでは、ほかのどんな場合にも、私の意志があまりに強い欲望にとらえられそうになるときには、同じようにふるまおうとしている。(III, 10, 1059-1060/1014)

ところで、恋愛の情念に抵抗したと語るモンテーニュは他方で、「それ〔悲しみ〕をまぎらすために〔…〕わざと、努めて恋をあさった」(III, 4, 877/835)とか、老年になった今、「ときに精神をみだらで若い考えに没頭させて、そこで休ませる」(III, 5, 882/841)と言っていた。この矛盾をどう解釈すべきか。

これは現段階では仮説にとどまるが、モンテーニュにおいて、恋を求めることも、恋から逃げることも、みだらな考えに精神を休ませることも、すべて「自己を自己からそらさぬこと」すなわち、自己の理知的部分を自己の情動的部分に服従させないための方策なのではないか。

モンテーニュにとって人間の「情念 affection」は、御しがたい獣のようなもので、それゆえに彼は、これを抑えることを brider (手綱を締める) という語で表現していた。彼はまた、「無為について」の章のよく知られた一節で、隠遁生活を始めるに際して自分の精神を無為のうちに過ごさせようと決心したとこ

ろ、精神はかえって「放れ駒のように」暴れだし、「妄想や空想の怪物」を次々に生み出すようになったと語っている (I, 8, «De l'Oysiveté», 55/33)。自己の情念や感情は、自己の一部でありながら、自己の理性や意志のままにならない、別の生き物のようなものなのだ (モンテーニュはまた、見せかけの恋が本気になる例を挙げている²⁴⁾)。そのため、理性はこの生き物の手綱を、ときには締め、ときには緩めながら、うまく共存していかなければならない。「自己を自己からそらさぬこと」とは、そのような微妙な技によって可能になる事態なのではないか。そのように考えると、モンテーニュにおいて自己の「気をそらすこと」も、「自己を自己からそらさぬ」という目的のための要請であると解釈できる²⁵⁾。彼は、自分は肉欲を理性によって制御できると語る際に、「人はその瞬間にでも、望むなら、精神を別の考えへと向けることができる (rejeter l'âme [...] à autres pensemens)」(II, 11, «De la cruauté», 451/430) と説明している。理性の力を凌駕する情動は、決して根絶することはできない。あくまでも心を別のところに向け変えて、その影響力を暫時緩和するのである。

ただし、モンテーニュにとって、自分の理性や意志それ自体は変化し、たわみやすいものであるし、そもそも自己の意志が何かということ、つねに自分が把握できるものでもない。自身の意志の把握そのものが困難な課題なのである²⁶⁾。彼は『エッセー』最終章「経験について」のなかで、こう記している――

自分の存在を正しく享受することを知ることは、神業といってもよい絶対的な完成である。我々は自分の境遇を享受することを知らないために、他人の境遇を求め、自分が何者かを知らないために、自分の外に出ようとする。(III, 13: «De l'expérience», 1166/1115)

これまで見てきたことから考えると、モンテーニュの「気をそらすこと」は、このような自己の享受、自己探求の一環であると位置づけられるようにすら思われる。モンテーニュにおける「気晴らし」は、見かけほど気楽なテーマではない。

最後にパスカルの「気晴らし」について一言しておく、これはあくまでも自己探求――自己の死すべき運命の自覚のもとに、この生涯をどのように送ればよいかを考えること――の阻害要因であった (S513-L620)。パスカルはモンテーニュの思想の鍵となる表現や発想を借用しながら、それをまったく異なる

思想の体系のなかに組み込んでいる²⁷⁾。

*

モンテーニュにおいて旅の目的は「判断」の形成であるとともに、「動くこと」そのものである。すなわち、旅の目的は旅そのものでもある。真の判断力形成という目的は、どのような判断力を形成するのかという目的そのものの宙づりによってしか果たせない。判断の形成のためには、目的論的な発想そのものを回避しなければならない。

このような考えは、モンテーニュが、目的に至るまでの手段を楽しむ姿勢（狩りにおいて、獲物を得る見込みがなくても狩りを楽しむ、目的を定めずに学問そのものを楽しむなど）、恋愛成就までの経過を楽しむためにそれを長引かせることを求める姿勢、さらには、書物において主題から逸脱する叙述を魅力的で美しいと讃える姿勢と軌を一にしている。

こうした、あえて目的からの逸脱を好むモンテーニュの傾向はまた、「気をそらすこと」「気分転換」を、人間の苦しみや悲しみに対する有効な治療法とみなして推奨する態度と結びついているように思われる。ここに共通するのは、精神を一方向に向けることの弊害に対する危惧である。

では、そのような危惧と、モンテーニュの「自己を自己からそらすこと」に対して「全力で抵抗する」という宣言とは、どのように両立するのだろうか。実のところ、「自己を自己からそらさぬこと」とは、自己の欲望に忠実になることではなく、それとは正反対の、自己を激しい利己心から解き放つことという意味である。人間は自己の欲望を他人からの期待に過剰に適合させることで、他者からの敬意や愛情を得て自尊心を満足させる傾向にある。だが、モンテーニュにとってこれは、「自己を自己からそらさない」、「自己に集中する」という理想的な状態に真っ向から反するふるまいなのである。

モンテーニュが求めてやまないこの状態は、自己の情動を自己の理性によって統御する状態と理解できる。そのように見ると、「気をそらすこと diversion」は、おのれの御しがたい情動を操作するための戦略ではないかとの推測が成り立つ。モンテーニュにとって「気分転換」は、「自己の存在を正しく享受する」という、彼の最終目的へと至る手段であると評価できる。

だが、旅において寄り道や迂回が、書物において主題からの逸脱が、枢要なものとして評価されたように、この「手段」としての「気分転換」もまた、人生の目的そのものと化す可能性をはらんでいる。パスカルが警戒したのは、まさにそのような事態であった。この点の検証は、別の機会にゆずる。

引用凡例

1. モンテーニュ『エッセー』からの引用に際しては、次の版のテキストに従い、出典を巻数、章数、頁数で示す（初出の場合のみ章題も付す）。
MONTAINGE, *Essais*, édition établie par Jean BALSAMO, Michel MAGNIEN et Catherine MAGNIEN-SIMONIN, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2007.
また、「/」のあとに次の版の当該頁数も付記する（例：I, 25, «De l'institution des enfants», 158/153-154）。
MONTAIGNE, *Essais*, édition de Pierre VILLEY, sous la direction et avec une préface de Verdun-Louis SAULNIER, Paris : PUF, coll. «Quadrige», 1992, 3 vol.
2. パスカル『パンセ』からの引用に際しては、次の版のテキストに従い、該当箇所を断章番号を記号 S (Sellier) とともに示す。また、ラフユマ版 (1951 年) による断章番号を記号 L とともに付記する（例：S31-L412）。
PASCAL, *Les Provinciales, Pensées et opuscules divers*, textes édités par Gérard FERREYOLLES et Philippe SELLIER, Paris : Librairie Générale Française, coll. «La Pochothèque», 2004.

註

- 1) 本稿は、2016 年 12 月 4 日開催の関西シェイクスピア研究会例会の招待講演「モンテーニュにおける〈気をそらすこと〉と〈自己を自己からそらさないこと〉」の発表原稿に加筆修正を施したものである。また本稿は「JSPS 科研費：課題番号 17K02594」による研究成果の一部であることを付記する。
- 2) うち、II, 12 「レーモン・スポンの弁護」との関連箇所は 74 で約 3 分の 1 を占める。Voir Bernard CROQUETTE, *Pascal et Montaigne. Étude des réminiscences des Essais dans l'œuvre de Pascal*, Genève : Droz, 1974.
- 3) 新版：東京創元社，1989 年。
- 4) とりわけ次の研究が優れている—— Hélène MICHON, *L'Ordre du cœur. Philosophie, théologie et mystique dans les Pensées de Pascal*, Paris : Honoré Champion, coll. «Lumière Classique», 1996 / coll. «Champion Classiques Essais», 2007.
- 5) Dictionnaire *Le Petit Robert* [éd.] 2015.
- 6) Antoine FURETIÈRE, *Dictionnaire universel* (1690), art. «divertissement».
- 7) Voir Jean MESNARD, «De la diversion au divertissement», in *id.*, *La Culture du*

- XVII^e siècle. *Enquêtes et synthèses*, Paris : PUF, 1992, p. 68. なお、フルティエールの *diversion* の項には戦争用語として「敵の弱点を突き、援軍を求めるためによそに追いやること」という語義と、医学用語として「治療によって鬱血の流れを外にそらせようとする」という語義も記されていて、より術語的であったのかもしれない。この項目のなかで、「悲しんでいる人物に与えられる慰めが、その人の苦しみをいくぶんかそらした (*fait quelque diversion de sa douleur*)」という用例は最後に置かれている。
- 8) 拙著『パスカルと身体が生』大阪大学出版会, 2014年, 第六章「人間の尊厳」, 183-203頁を参照。
 - 9) リュシアン・フェーヴル『フランス・ルネサンスの文明——人間と社会の四つのイメージ』二宮敬訳, ちくま学芸文庫, 1996年, 60頁。
 - 10) 次を参照——『モンテーニュ旅日記』関根秀雄・斎藤広信訳, 白水社, 1992年; 斎藤広信『旅するモンテーニュ——十六世紀ヨーロッパ紀行』, 法政大学出版局, 2012年。
 - 11) モンテーニュは, III, 8「話し合う方法について」でこう語っている——「人間の知恵が運命の役割を果たしうると考えるのは浅はかだ。また, 原因と結果を把握し, 自分の手で自分の仕事を導いていると思ひ込む者の企ては空しい」(III, 8, «*De l'art de conferer*», 979/934)。
 - 12) なお, パスカルもまた『パンセ』S329-L298において, 論述に際しては原理と証明からなる「精神の秩序」(「幾何学的秩序」)を斥け, 「逸脱」を特徴とする「心の秩序」「慈愛の秩序」に従うことを表明しているが, 彼においてこれは, 目的から遠ざかることではない。むしろ「最終目的」をつねに示すための方策なのである。パスカルにとって, 「順序を無視して」書くというそのことが, 「真の秩序」に従うことであって, それによって「私の目的がつねにしっかり示される」のである (S457-L532)。
 - 13) ジャン・メナルが指摘するように, モンテーニュの「気をそらすこと *diversion*」は, 人間の不幸や死への恐怖を癒やすための治療策であるのに対し, パスカルの「気晴らし *divertissement*」は, 人間が置かれた悲惨な境遇 (いざれ死ぬという境遇) から目をそらすために本性的にもつ傾向である。前者は行為であり, 後者は状態である (Voir MESNARD, art. cité, pp. 71-72)。
 - 14) ジャン・スタロバンスキーは次のように述べる——ホルクハイマーによれば, モンテーニュは「活動的人文主義」の要請を認めることができなかったのであり, 「人間と動物に対するモンテーニュの博愛心がいかなるものであれ, 彼の考えの中心は, 論理的には, 自分の内面の慰いと自分の経験的自我の安全とでありつづけたのである」(ジャン・スタロバンスキー『モンテーニュは動く』早水洋太郎訳, みすず書房, 1993年, 427頁)。
 - 15) ジャン・メナルは, 「自己愛 *amour-propre*」に対する批判の系譜を, パスカルからエラスムス, ラブレール (エラスムスは「自己愛」をギリシア語の *φιλαυτία* で指

- 示し、ラブレーはこの語を *philautie* と訳している)、アウグスティヌス、パウロ、アレクサンドリアのフィロンへと順に過去にさかのぼって考察し、最終的な起源をプラトン(およびソクラテス)に見出している。次を参照—— Jean MESNARD, «Les origines grecques de la notion d'amour-propre», in *id.*, *La Culture du XVII^e siècle*, *op. cit.*, pp. 43-47.
- 16) モンテーニュは、「残酷について」の章(II, 11)で、猛り狂った欲望、恍惚、逆上による残酷を非難している。また、宗教上の対立からくる憎しみによる暴力も否定し、党派を超えて、プロテスタントであるアンリ・ド・ナヴァールを支持した。次を参照——マイケル・A・スクリーチ『モンテーニュとメランコリー』(荒木昭太郎訳)、みすず書房、1996年、132-138頁。
- 17) 前掲拙著、第一章「愛と邪欲」、3.「自己愛」、21-27頁を参照。
- 18) 「人相について」の章にも、この主題に関する記述が見られる。次は、世間の自分に対する評価への関心が、いかに本来の自己を尊重することを妨げているかを告げる一節である——「私は、もうすでに長い間、自分自身に執着するように、それ以外のことがらから離れるように、自分に言い聞かせている。それでもまだ私はいつも、目をよそに向けてしまう。お偉方のお辞儀や好意的な一言、他人の好意的な表情が、私を誘惑するのだ。今日、そうしたものが稀にしかないかどうか、また、それらが本心からのものかどうかは、神のみぞ知るだ。今でも私は、私を世間に引っ張り出そうとしてお世辞を言われることがあるが、それを眉ひとつ動かさずに聞き流している。私はそうしたお世辞に対してひどくやんわりと身をかかわすので、私はむしろ好んでそれを聞き入れているように見えるかもしれない。だが、かくも聞き分けのない精神は棒で叩いてやらねばならないし、分裂、瓦解し、ひとりでに箍がはずれ、ほどけてばらばらになる樽は、金槌で何度も打って、しっかりと締め直さなければならぬ」(III, 12, «De la Physionomie», 1091-1092/1045-1046)。ほかに、III, 11, «Des boyteux», 1074/1028 も参照。
- 19) ところで、演劇批判を行うピエール・ニコルにおいて、俳優が危険な職業であるのは、俳優において演技が彼の本質に影響を与えるからである。つまり、「仮面」と「本質」とが一体化し、区別できないからであるという。ニコルにとって、うまく演じるためには、俳優の演技は単に見かけの水準にとどまっていたはならず、俳優の存在の奥深くにまで浸透していなければならない。「顔の皺」が「魂の皺」と一致していなければならないのである。俳優はそのような作用を意識しているわけではないが、知らず知らずそれに毒されている。ニコルはさらに、俳優は演技によって、自分とは無縁の感情(*passions*)をも生じさせるとさえ主張する(voir Pierre NICOLE, *Traité de la Comédie*, 1667, 1675)。なお、このような見解とデイドロの見解とは真っ向から対立する。デイドロは、俳優の仕事は、演じられる情念の冷静な分析にあり、情念への共感むしろ演技の障害になると主張した(voir DIDEROT, *Paradoxe sur le comédien*)。以上については次を参照—— Laurent THIROUIN, *L'Aveuglement salutaire*, Paris : Honoré Champion, coll. «Lumière Classique», 1997, pp. 56-62.

- 20) モンテーニュの名誉欲批判について、III, 10, 1069/1023 を参照。
- 21) Cf. 「我々の欲望の競走場は、我々にもっと近くて狭い安楽さの限界に制限されなければならない」(III, 10, 1056/1011)。
- 22) したがってモンテーニュは、義務と内面の自由の間に均衡を保ちながら双方を尊重すべしと説いていると解釈できるだろう。彼は一方で、「我々は魂の自由を大切に、正当な理由がなければこれを抵当に入れてはならない」(III, 10, 1049/1004) と言い、他方で「私は、いったん引き受けた職務に対しては、注意、労苦、弁舌、汗、そして必要とあれば血をも拒むべきではないと思う」(III, 10, 1052/1007) と述べている。モンテーニュは、いかに公務(義務)であっても、自己の本源的な意志に基づいて行わねばならない、そのためにこそ、自己に対する真の務めは何かということを知らねばならないと主張しているのではないか。J・スタロバンスキーもこう述べている。「モンテーニュは自分の文章を、まったく均衡した、二重の教えを表明するように構成している。[...] それゆえ、行動に身を投ずることと、自己の内部に、外部からの働きかけにも内面の動揺にも乱されない平静を守ることの両方が望ましい」(スタロバンスキー前掲書、430頁)。
- 23) プラトンによる魂の機能の三分区：①「理知的部分」(知を求める)、②「気概的部分」(名誉を求める)、③「欲望的部分」(金銭を求める)。
- 24) III, 4, 878/836.
- 25) モンテーニュは、「自己の意志を節約することについて」の章で、次のような逸話を記しているが、これらはいずれも、「自己をそらさぬ」ために「気をそらす」例として解釈できるのではないか。①ゼノンが美少年のクレモニデスが自分のそばに座りそうになると、興奮を避けるために突然立ちあがった。②ソクラテスは、「美貌に見つからないように、それと出会わないところに走れ」と言った。③聖書には、「われらを試みに会わせ給うことなかれ」とある(III, 10, 1061-1062/1015-1016)。モンテーニュは同じ章で、「私にとっては、情念を抑えることは難しいが、避けるのはやさしい」と書いている(III, 10, 1066/1019)。
- 26) Cf. 「私はさらに、我々の知恵や熟慮さえも、たいていの場合は偶然の導きに従うと言いたい。私の意志と思考は、ある風に動かされるかと思えば、また別の風に動かされる。また、その多くの動きは、私とは無関係に発生するのだ。私の理性は、日々変化する、偶発的な衝動と動揺にさらされている」(III, 8, «De l'art de conferer», 979/934)。
- 27) J・メナールは言う——「モンテーニュの文体がパスカルの文体の形成に貢献したことは間違いないが、それ以上に、モンテーニュの思索はパスカルの思索の形成に——しばしば自立的な仕方——貢献した。とはいえ、前者の思想が後者の思想のなかに見つかるわけではない。むしろ、前者の思想は後者の思想を生み出したのである」(MESNARD, «De la diversion au divertissement», art. cité, p. 68)。